

札幌国際大学
地域・産学連携センター年報
第 10 号

札幌国際大学
地域・産学連携センター

札幌国際大学
札幌国際大学 地域・産学連携センター年報
第 10 号

目 次

<事業報告>

1. 令和 7（2025）年度 浦河町・地域連携事業報告
[子育て支援分野] ① 学びの土台づくり事業 ②公開講座（学生企画イベント）
林 二士・小岩 季之 pp1-10
2. 令和 7（2025）年度 地域・産学連携センター公開講座 [今金町]
2025 年度今金町地域連携事業報告
本多 理紗 pp1-6
3. 令和 7（2025）年度 地域・産学連携センター共同研究 [札幌市清田区]
清田区の高齢者を対象とした脳の活性化トレーニング
国田 賢治・佐藤 文亮
(協力)札幌市清田区、清田 Hi 遊会..... pp1-5
4. 令和 7（2025）年度 地域・産学連携センター共同研究 [札幌市及び公財]札幌国際プラザ]
『札幌市の国際化推進等に関する連携協定』連携事業：「多文化共生社会創成プロジェクト」報告書
陳 堯柏・[国際課]松村 知美
(協力)札幌市教育委員会 pp1-7
5. 令和 7（2025）年度 地域・産学連携センター共同研究 [沼田町]
沼田町とのスポーツ健康領域に関する連携事業に関する報告書
佐藤 文亮・国田 賢治[p1], pp2-11

2025（令和7）年度 浦河町・札幌国際大学地域連携事業報告

札幌国際大学短期大学部

林 二士・小岩 季之

1. 事業概要

（1）事業名

浦河町・札幌国際大学地域連携事業

① 学びの土台づくり事業 ② 公開講座（学生企画イベント）

（2）実施目的

本事業は、浦河町と札幌国際大学との地域連携事業として、子育て支援分野における地域課題の解決と、学生の実践的学びの充実を目的に実施した。

近年、全国的に子どもの体力・運動能力の低下が指摘されており、北海道においても運動機会の減少や身体活動量の低下が課題となっている。浦河町においても、幼児期からの運動習慣形成や、子どもの主体的な遊びを支える環境づくりが求められている。

本事業では、「学びの土台づくり事業」として、幼児への運動遊び支援や保育者向け研修等を実施するとともに、「公開講座」として学生主体による運動遊び・自然遊びイベントを企画・実施した。また、学生が地域の子育て環境や保育現場に触れることで、地域理解を深めるとともに、将来的な保育人材育成・地域定着につながる機会とすることも目的とした。

2. 実施体制

項 目	内 容
担当教員	林 二士・小岩 季之
連携先	浦河町子育て医療課
参加学生	短期大学部学生 23 名 (運動遊びコース 10 名・自然遊びコース 13 名)

3. 事業内容

（1）学びの土台づくり事業

「幼児期からの学びの土台づくり事業」として、幼稚園・保育所・こども園を対象に、体力測定、運動遊び指導や実践的支援を実施した。また、保育者向け研修や地域イベントへの協力を通し、地域全体の子育て支援力向上を図った。

主な実施内容

- ・ 幼児への運動遊び支援
- ・ 保育者向け実技研修
- ・ 地域子育てイベントへの協力
- ・ 公開講座に向けた学生研修

2025 年度 実施状況

① 子どもまんなかフェスティバルへの協力（2025 年 6 月 7 日・8 日）

浦河町にて開催された「こどもまんなかフェスティバル」において、教員が「子ども体操教室」のコーナーを担当した。

当日は3歳から小学3年生まで32名の参加があり、親子で楽しみながら身体を動かす機会を提供した。イベント全体では約550名の来場があり、地域住民との交流を深める機会となった。

② 公開講座に向けた学生研修（2025年7月14日）

公開講座を担当する学生を対象に外部講師を招聘し、自然遊びに関する実技研修を実施した。「光る泥団子づくり」等の自然遊びを実際に体験しながら、幼児の主体性を引き出す関わり方や、遊びを通した学びの支援方法について理解を深めた。

③ 事前打合せ・会場下見（2025年9月11日・12日、2026年1月）

浦河町役場、浦河町総合文化会館、ゼロネクストワンアリーナを訪問し、担当者との打合せおよび会場確認を実施した。

また、2026年1月には浦河町担当者とのZoom会議を行い、公開講座の運営方法や安全管理体制について協議した。

④ 学びの土台づくり事業 まとめの研修（2026年3月9日）

町内保育士を対象とした「まとめの研修」を実施した（参加者18名）。本年度の幼児運動能力調査の結果に加え、小学校1年生・4年生児童の追跡調査（新体力テストとの比較）に基づいた多角的な考察を行った。

研修では、幼児期の運動遊びの重要性や、日々の保育の中で実践できる運動遊びの工夫について共有を行い、保育現場における継続的な実践につながる内容となった。

（2）公開講座（学生企画イベント）

期 日 2026年2月5日（木）～7日（土）

会 場 ゼロネクストワンアリーナ・子育て支援施設 他

内 容

- ・学生が主体となり、幼児向けおよび親子向けの運動遊び・自然遊びイベントを企画や運営した。
- ・企画立案、遊び内容の構成、必要物品の準備、リハーサル、当日の進行・運営までを学生が中心となって行い、課題解決型学習（PBL）の実践の場となった。
- ・昨年度に引き続き土曜日開催を継続したことで、親子参加型イベントとして地域に定着しつつあり、中高生ボランティアの参加機会拡大にもつながった。

参加者	人数
浦河町内年中長（2/6）	50名
町内 親子参加（2/7）	子ども36名・大人21名
中高生ボランティア	6名
学生スタッフ	23名

4. 学生の取り組み

本事業では、学生が主体的に活動を展開した。授業（保育プロジェクト演習）内では、対象年齢に応じた遊び内容の検討、安全管理、活動導線、役割分担等について協議を重ね、実践に向けた準備を行った。

また、子どもの発達段階や興味関心を踏まえた遊び内容の工夫を行い、当日は子どもの反応に応じて柔軟に関わる姿が見られた。特に、学生同士で協力しながら活動を進める中で、コミュニケーション力や実践的な保育技術、企画運営力を高める機会となった。

◇内容① 運動遊びゼミ

1 日目 『へやのなかでもゆきあそび』 【約 45 分】

⇒園児向け「ゆき遊び」をテーマにした運動遊び

- ①絵本「できるかな」の中の動物の動きに合わせて一緒に体を動かす
- ②新聞ボールを使って「ボール投げゲーム」
- ③ゆき遊びをテーマにした障害物リレー遊び

2 日目 『おやこでチャレンジ！うごいてたのしい運動あそび』 【約 45 分】

⇒親子向け 親子で走る・跳ぶ・投げるなどの運動遊びをする

- ①親子ふれあい遊び
- ②ドンジャンケン
- ③鬼ごっこ（しっぽとり⇒ネコとネズミ）

◇内容② 自然遊びゼミ

1 日目 『風遊び』 【約 45 分】

⇒園児向け：ビニール袋を活用した凧を作成する

- ①ビニール凧作り
- ②ビニール凧あげリレー

2 日目 『自然素材制作遊び』 【約 45 分】

⇒親子向け：自然物を活用した小物作り

- ①〇×クイズ 浦河町に関連したお題：いちご、馬、子どもの数等
- ②自然素材制作遊び
木のコースター/木のペンダント/紙皿リース/紙粘土で小物作り（キャラクター等）

5. 学生の学び・感想から

- ・子どもたちが楽しそうに活動している姿を見て、事前準備や環境構成の大切さを実感した。
子どもの様子に応じて声掛けを変える必要があり、実際に関わることで多くの学びを得ることができた。
- ・地域の方々や保護者と交流する中で、地域全体で子どもを育てることの大切さを感じた。
- ・学生同士で協力しながら一つの活動を作り上げる経験となり、自信につながった。

6. 事業成果

（1）地域への成果

幼児が身体を動かしながら主体的に遊ぶ機会を提供することができた。
親子参加型イベントとして地域に定着しつつあり、継続的な地域交流につながった。
保育者向け研修を通して、地域保育者への実践的支援を行うことができた。
中高生ボランティアの参加により、将来的な保育人材育成へのきっかけづくりとなった。

（2）教育的成果

学生が企画立案から運営まで主体的に取り組むことで、実践的な保育技術や企画運営力を高める機会となった。

地域の子ども・保護者と直接関わることで、保育者として必要なコミュニケーション力や柔軟な対応力を養うことができた。

地域の保育・子育て環境への理解を深める機会となった。

(3) 数値目標に対する評価

公開講座および地域イベントともに、当初想定を上回る参加者があり、数値目標は概ね達成された。

また、継続開催により地域内での認知度が高まりつつあり、親子参加型イベントとして一定の定着が見られた。

7. 課題と今後の展望

(1) 課題

本事業は、学生にとって地域理解を深める機会となった一方で、浦河町への就職や人材定着への直接的な効果については課題が残った。

特に、本事業の実施時期が短期大学2年次後期となるため、多くの学生が既に就職先を決定している状況にあり、地域での就職促進に結びつきにくい現状が見られた。

また、中高生ボランティアとの交流時間が十分に確保できず、継続的な関係構築に向けた工夫も必要である。

(2) 今後の展望

今後は、現在の活動を継続しつつ、地域ニーズに応じた子育て支援活動の充実を図るとともに、本学の人的資源を活かした実践的な地域連携を推進していく。

また、事業実施時期の見直しや、学生が早期から浦河町の保育・子育て環境に触れる機会を設定することで、将来的な人材確保や地域定着につながる取り組みへと発展させていきたい。

さらに、中高生ボランティアとの交流機会を意図的に設けるなど、地域における保育人材育成の視点を含めた継続的な連携体制の構築を目指す。

8. 添付資料

幼児期からの学びの土台づくり事業

①浦河町広報掲載記事 ②日高報知新聞掲載記事 ③こどもまんなかフェスティバル チラシ

公開講座（学生企画イベント）

①学生の活動の様子 ②研修の様子 ③日高報知新聞掲載記事 ④公開講座チラシ

9. 総括

本事業は、地域課題である子どもの運動機会の充実や子育て支援に寄与するとともに、学生にとっては実践的な学びの機会となった。

特に、学生が主体となって企画・運営を行うことで、保育実践力や協働性、地域理解を深める機会となり、大学教育と地域貢献を結び付ける意義ある取り組みとなった。

今後も浦河町との継続的な連携を通して、地域に根差した子育て支援および保育者養成の充実に取り組んでいきたい。

資料

幼児期からの学びの土台づくり事業

①浦河町広報 掲載記事 こどもまんなかフェスティバル



②日高報知新聞 掲載記事 こどもまんなかフェスティバル



③こどもまんなかフェスティバル イベントチラシ

うらかわ

こどもまんなかフェスティバル

参加
無料

こども体操教室

鉄棒や跳び箱・縄跳びなどを使って楽しく運動しよう！

10:45～11:20

対象：3歳～小学校3年生

定員：こども30人

※事前申し込みが必要です

講師 札幌国際大学短期大学部
幼児教育保育学科
林 二士 氏

10時から
オープニングセレモニー
を行います！

町内のゆるキャラも
集まるよ！

**親子で楽しむ
ふれあい遊び**

みんなで遊んで歌って楽しもう！

10:15～(30分程度)

対象：どなたでも(親子)

講師 遊び塾はらっぱ主宰
荒牧 光子 氏

体験コーナー

保育所のおもちゃ、
巧技台などの遊びを
体験しよう！

こども食堂

まちなか元気ステーションのオレンジ
カフェのみなさんがカレーやパスタな
どを提供します！

11:30～13:00

料金
1食 100円

フリーマーケット

こども服・育児用品
雑貨などを販売します！

2F アートホール

工作体験

自分だけの布バッグや
缶バッジを作ろう！

2F 美術工芸室

木工クラフト体験

木の工作を楽しもう！

講師
URAKAWA yamori
のみなさん

2F 美術工芸室

絵本リサイクル

役目を終えた絵本を
ご自由にお持ち帰り
いただけます！

1F 図書館前

※特に記載がないブースはメイン会場の3階ふれあいホールで開催します。

※当日は景品がもらえるスタンプラリーも行います！ぜひたくさんのブースへお越しください！

その他浦河高校写真部などの
展示ブースも盛りだくさん！

2025.6.8 日 10:00～13:00

浦河町総合文化会館
3階 ふれあいホールほか



←町HPはこちらから
ご覧ください

「こども体操教室」は事前申し込み制です
★申込方法など詳しくは町ホームページをご覧ください

申込期間：5月28日(水)まで (定員になり次第締切)
●浦河町役場 子育て医療課 26-9002

共催 浦河町・浦河町教育委員会



公開講座（学生企画イベント）

①学生の活動の様子（2/6）

運動遊び



学生が子どもの反応に応じて遊び内容を柔軟に展開した



子どもたちは友達と協力しながら主体的に遊びに参加していた

制作遊び（ビニール凧）



①学生の活動の様子（2/7）

親子運動遊び



学生同士で役割を確認しながら活動運営



親子で身体を動かしながら交流を深めた

自然物を使った制作遊び



紙皿リース作り



紙粘土で小物作り



木のコースター&ペンダント作り

自然素材を活用しながら、子どもの主体性を引き出す関わりを実践した



地域子育て支援施設の見学を通して、浦河町の子育て環境への理解を深めた



親子で運動、造形遊び

浦河町と札幌国際大が連携イベント

浦河町と札幌国際大学（以下、国際大）が、子育て世代の交流と、子育て支援を目的に、親子で運動、造形遊びイベントを開催した。運動会、親子で運動、造形遊びイベントの4日、子どもたちが、親子で運動、造形遊びイベントを開催した。

親子で運動、造形遊びイベントは、親子で運動、造形遊びイベントを開催した。親子で運動、造形遊びイベントを開催した。

親子で運動、造形遊びイベントは、親子で運動、造形遊びイベントを開催した。親子で運動、造形遊びイベントを開催した。

2017

日 高 報 知 新 聞

(第3 種郵便物認可)

親子で運動、造形遊びイベントは、親子で運動、造形遊びイベントを開催した。親子で運動、造形遊びイベントを開催した。

親子で運動、造形遊びイベントは、親子で運動、造形遊びイベントを開催した。親子で運動、造形遊びイベントを開催した。

浦河町×札幌国際大学地域連携公開講座



大学生といっしょに 楽しくあそぼう！



2026. 2/7 土

am 10:00～11:40

会場 ▶ ゼロネクストワンアリーナ

対象

町内在住の
3歳～小学校3年生

定員

こども50人
(保護者同伴)



保育のプロを目指す大学生が考案した運動遊びと造形遊び！
親子で楽しく、いっしょに遊びましょう！
(写真は昨年の様子です)



事前申し込み制となりますので、町公式LINE（右のQRコード）からお申込みください。

申込期間：1月28日（水）まで
(定員になり次第締切)

町公式LINEが起動しますので、
「アンケートに回答する」を
タップしてください。



主催：浦河町役場子育て医療課、札幌国際大学短期大学部幼児教育保育学科

問い合わせ先

浦河町役場子育て医療課 ☎0146-26-9002

令和7年度（2025）年度 地域・産学連携センター事業公開講座
2025 年度今金町地域連携事業報告

スポーツ人間学部スポーツ指導学科 本多 理紗

1 事業の背景及び目的

札幌国際大学でのスポーツクラブは、スポーツ活動を通して、清田区民の健康増進を図り、地域社会（清田区）への貢献に資することやスポーツ人間学部の教育活動における実践的な学びの場とすること、清田区民と本学学生及び教職員との交流を深め、コミュニティの形成に寄与することを目的とし、令和2年度にプレイベントとしての実証事業を経て、令和4年4月に設立した。

一方、本学と地域連携協定を平成24年（2012）年度に締結した今金町は、北海道渡島半島の北部に位置し冷涼な気候の下、豊かな土壌と清流・後志利 別川に育まれた町である。農業が盛んで日本一の「今金男爵」など多くの農作物や美しい自然環境、歴史的史跡も多くあり、地域資源に恵まれた自治体である。しかし、人口減少と高齢化の進行が進んでおり、健康寿命の延伸を図るなど、地域の人的資源、社会資源を効率的かつ効果的に活用していくことが求められている。

そこで本事業では、地域連携協定のもと、本学と多彩な連携事業を展開してきた実績のある今金町をフィールドワークとして大学が有する資源であるスポーツクラブ事業をアウトリーチすることによって、地域課題である健康寿命の延伸に寄与しようというものである。今回は、児童対象と高齢者対象でのアウトリーチを行った。

2 児童対象「モルック交流会」の概要

モルックは、フィンランド発祥のニュースポーツである。ルールも簡単で幅広い年齢層が楽しめるスポーツであり、北海道でも各地で大会等が開催されている。今回は、今金町の児童41名が集まり、大学生とモルックのルールの確認や試合を行い楽しみながら交流を深めた。教職を履修している3年生が主となり、4年生はピアサポートとして事業に携わった。

（1） 日時 令和7年8月5日（火）14時～16時

（2） 場所 今金町総合体育館

- ① 札幌国際大学スタッフ自己紹介
- ② モルックのルールについて
- ③ グループ分け、練習
- ④ 試合
- ⑤ 閉会

3 活動の様子



4 高齢者対象「健康特別教室」の概要

大学でのスポーツクラブでは、年に6回高齢者を対象として「健康教室」を開催している。スポーツクラブの運営の経験を活かし、3年生が中心となり、これまでの運営経験を活かして、楽しく身体を動かしながら交流を深める90分のプログラムを計画した。実施にあたっては4年生がサポートに回り、学生同士の連携を図りながら運営を行った。今回は9名の参加者が集まり、和やかな雰囲気教室となった。

(1) 日時 令和7年8月6日(水) 10時～11時半

(2) 場所 中里交流センター

- ① 札幌国際大学スタッフ自己紹介
- ② アイスブレーキング(指折り体操、2拍子・4拍子、文字当てゲーム、キャッチ)
- ③ 筋力トレーニング(カーフレイズ・トゥレイズ)
- ④ リズム体操(め組のひと)
- ⑤ レクリエーション活動(クップビンゴ)

5 活動の様子





参加者の感想

- ・手の運動が難しいそうだったが、実際にやってみると楽しかった。
- ・すごく楽しく良い運動になった。来年も来たい。
- ・ずっと楽しかった。以前やったモルックが楽しかったから次回はぜひモルックをやりたい
- ・とても楽しかった。来年もお願いします。
- ・とても楽しかった。昨年も参加し、今回も内容もよかった。少し暑かった。
- ・人暮らしで仕事もしているので、足腰の運動ができて良かったし、楽しかった。普段は草取りなどをして体を動かしている。
- ・楽しかった。普段レクをやらないので、体操よりも遊ぶ系が良い。ダンスの時のじゃんけんが勝てなくて悔しかった。脳トレも紙があってわかりやすかった。
- ・楽しかった。遊び系の体を動かす取り組みをこれからもしていきたい。
- ・楽しかった。とても良い運動だった。

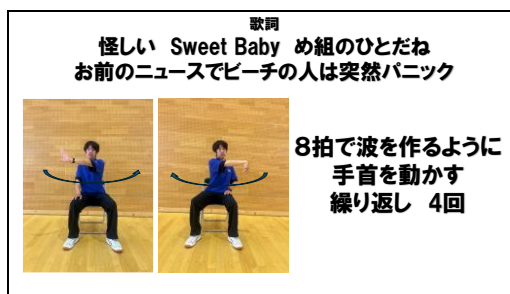
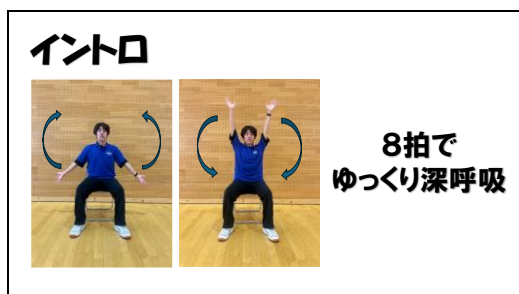
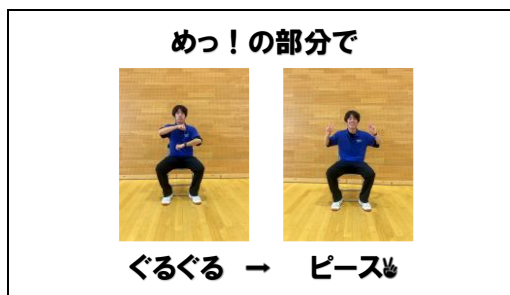
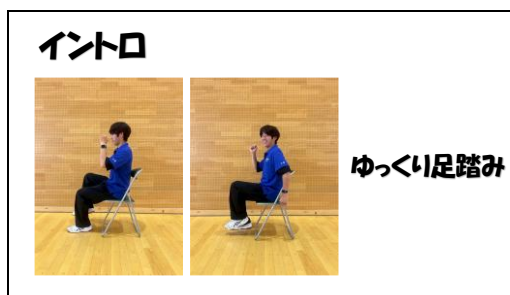
6 事業の成果と課題

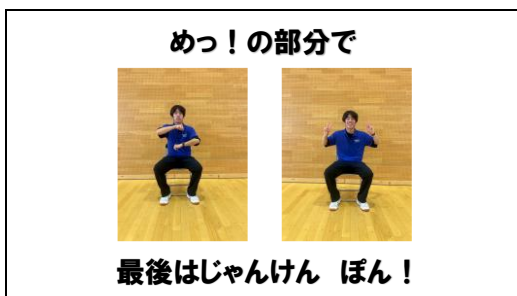
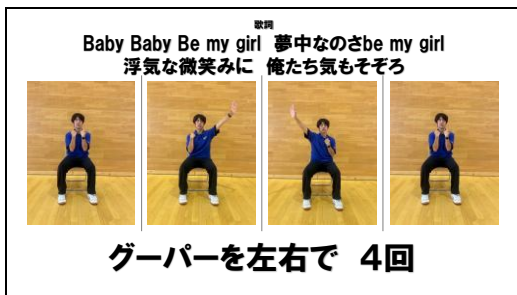
今回の事業を通して、学外での活動として幅広い年齢層の方々と接することや地域を知ることができとても貴重な経験となった。学生たちは、自身の知識や技術が現場のリアルな状況（児童の予測不能な動きや、高齢者のニーズ）に直面した際の葛藤を乗り越えることで、自身の関わり方が対象者に与える影響を再認識し、支援者・指導者としての意識の向上を図ることができた。また、参加者は、「楽しかった」「来年も参加したい」などの感想が多くあったことや普段の生活（一人暮らしや仕事、草取り等）の中では得られない運動機会や、脳トレへの前向きな反応が見ることができた。

今後の課題として、継続的に健康維持・増進へつながるような事業の展開を実施できる方法を考えていく必要があると考える。

7 資料※

(1) リズム体操





(2) クップビンゴ

クップビンゴの ルール説明①

- 右の写真のように座り、前方にクップを縦3つ横3つ3×3のマスのように設置します。



クップビンゴのルール 説明②

- ①カストビンナと呼ばれる棒を3×3のマスに置いたクップを倒すように投げます。
- ②投げるときはカストビンナを縦に握り、下から投げます。



クップビンゴのルール説明③

- クップを倒したら右の写真のようになり倒されてしまったら自分たちのチームは倒すことができません。
- 相手チームのリーチがあったら積極的にビンゴを阻止しましょう！



クップビンゴのルール説明④

- 頭を使い相手チームよりも先に縦、横、斜めのクップを倒して揃えたらビンゴになり勝利となります。



※資料「リズム体操」

札幌国際大学スポーツ人間学部スポーツ指導学科本多ゼミ 2025 制作

令和 7 年度(2025 年度)地域・産学連携センター共同研究 報告

清田区の高齢者を対象とした脳の活性化トレーニング

札幌国際大学スポーツ人間学部スポーツ指導学科

国田賢治

札幌国際大学スポーツ人間学部スポーツ指導学科

佐藤文亮

1. はじめに

平成 21 年度、本学と札幌市清田区との間で連携協定が結ばれた。この協定に基づき、高齢者の運動を通じた健康の維持・増進に関する地域連携事業を清田区および高齢者健康運動クラブの清田 Hi 游会と行っている。特に、平成 28-30 年度では、清田区内で春季から秋季にかけて実施されている地区ウォーキング中の心拍数測定を行った。この測定の結果、清田区内の地区ウォーキングは、呼吸循環系に対して最適な運動強度で実施されていることが明らかとなった。しかしながら、このウォーキングは冬季では実施されていない。北海道における冬季において、高齢者の多くが、運動不足であるとの報告を受けている。このことは、呼吸循環系の低下に限らず、身体機能の基盤となる脳の健康の顕著な低下にもつながるものと思われた。

我々は、先行研究において、スポーツを実践している大学生では、身構えた姿勢(頸部を前方に突出した姿勢:頸部前屈姿勢)を保持すると脳の活性化が生じ、眼球運動の反応時間が短くなるとの知見を得てきている。頸部前屈姿勢保持の主動作筋である頸背部筋へ振動刺激を行うと、眼球運動反応時間の短縮が認められるとの知見も得た。これらのことから、スポーツを実践している大学生では、頸背部筋からの感覚情報による脳の活性化が生じているとの知見を得た。さらに、スポーツクラブに所属したことの無い大学生を対象とした検討によると、この前屈姿勢保持による反応時間短縮がはじめは認められなかったが、前屈保持に伴う眼球運動反応トレーニングを 1 日に 5 分間、数週間行くと、頸部前屈保持に伴う脳の活性化トレーニング効果が生じるようになるとの示唆が得られた。

一方、高齢者で習慣的に運動を継続的に行っていない者は、頸部前屈姿勢を保持しても脳の活性化が生じないとの知見を得た。清田区在住高齢者を対象に、脳の健康の維持・増進につながる脳活性トレーニング法を開発することを念頭に、令和 3 年度から継続的に地域連携事業を行ってきている。令和 5 年度は、スポ

ーツを実践している大学生を対象に、新たに開発した振動刺激器を用いて、頸背部筋へ振動刺激を行うと、眼球運動反応時間が短縮することを確認した。令和 6 年度では、高齢者およびスポーツを実践している大学生を対象にした、頸背部筋への振動刺激時の眼球運動反応時間の変化について検討を行った。その結果、その変化には、加齢による影響が認められるとの知見を得た。

令和 7 年度では、高齢者を対象に、頸背部筋への振動刺激を伴う眼球運動反応トレーニングを 15 日間行い、そのトレーニング前後で安静頸部姿勢条件および頸背部筋への振動刺激条件での眼球運動反応時間を比較した。

2. 方法

被験者

被験者は、62～86 歳（平均 $76.7 \pm \text{SD}6.8$ ）の高齢者 12 名からなる。

装置とデータ記録

フレーム付きの椅子に被験者を座らせ、体幹の背面を垂直な背もたれにつけ、胸部及び腰部をコットンバンドで固定した。両膝を約 90 度に屈曲し、両足をフットレストの上に置いた。

頸部前屈角は矢状面における肩峰点に対する耳珠の回転角とした。この前屈角は、肩峰を中心点とし耳珠までの距離を調節することができる角度検出器を用いて、安静座位時と同じ角度に保った。また、前庭器官からの感覚刺激が一定となるように、重力線に対する耳眼水平線の角度を安静座位時と同じ角度に保った。この角度は、振り子様振子を用いた角度検出器を側頭部に取り付けて検出した。また、頸背部の伸筋を可能な限り弛緩させる目的で、支持台にて頭部を固定した。振動刺激時に頸部が伸展しないように後頭部に支持板をあてた。

僧帽筋へ振動刺激を行うために、僧帽筋直上の皮膚へ振動器（竹井機器 S-21208）の円柱状の突起（皮膚との接触面積 6.15cm^2 ）をあてた（図 1）。振動周波数は 60Hz とし、振動の振幅は 0.5 mm とした。振動刺激部位は、僧帽筋上部線維のほぼ中央とした。振動刺激装置にて加えられる僧帽筋への圧力は、振動器に取り付けたロードセルを用いて動ひずみアンプ（エー・アンド・デイ, AS1603）で検出した。測定開始直前に僧帽筋へ振動刺激装置を介して、振動せずに手動にて圧を加え、可能な限り筋を伸張し、その時の圧力を求めた。振動刺激負荷時には、最大の筋長とならないように、その約 70% の圧力を手動にて振動器を介し

て加えた。

衝動性眼球運動を誘発するために、視覚刺激装置（日本光電, SLE-5100）を用いた。視覚刺激用の左右の LED の点灯は、ファンクショナルジェネレータ（NF, WF1966）によって 2～4 秒の任意の時間間隔で交互に行った（図 2）。LED の高さはいずれも鼻根のそれと同じくし、LED 間の中心点と鼻根との距離を 50cm とした。LED は、視角が 20 度になるように、中心点から左右 10 度の位置に設定した。水平眼球運動は、電気眼球図法を用いて測定した。左右の外眼角部に表面電極をはり、前頭部中央にアース電極を置いた。電極の入力抵抗は 10 k Ω 以下にした。電極からの信号は、直流アンプ（日本光電, AN-601G）で増幅（ $\times 2000$ ）した。安定した電気眼球図を得るために、電極をはってから記録をするまでの時間を 20 分以上とした。

後の分析のために、ロードセル、電極及び視覚刺激器からの信号は、コンピュータ内の生体情報解析ソフト（Kissei Comtec）に記録した。

トレーニング内容

安静頸部姿勢にて、僧帽筋へ最大圧力の 70% で、振動周波数 60Hz、振動振幅 0.5 mm の刺激を負荷ながら眼球運動反応トレーニングを行った。その反応トレーニングは、2～4 秒の任意の時間間隔で左右交互に点灯する視標に対して眼球運動を行うものであり、それは 1 日につき 1 分間を 10 回ずつ行った。すなわち、眼球運動反応の試行は 1 日 200 回行うことになる。このようなトレーニングを 15 日間行った。

手順

測定に先立ち、僧帽筋が弛緩するように、深呼吸を行いながら上肢帯挙上筋の収縮と弛緩を数回繰り返した。僧帽筋の弛緩状態は、筋電図をモニターしながら検者が口答にて被験者に知らせた。このような状態で、トレーニング前後で、下顎部を支持台に置いた安静頸部姿勢条件、および僧帽筋へ最大圧力の 70% で、振動周波数 60Hz、振動振幅 0.5 mm の振動刺激条件で眼球運動反応時間を測定した。1 回の測定時間は 30 秒間とし、測定回数は各条件で 5 回ずつとした。休憩時間は測定間では 1 分間であり、条件間では 3 分間であった。

データ分析

眼球運動反応時間測定時のロードセルからの信号、電気眼球図及び視覚刺激のデータは、16ビットの分解能を持つコンピュータへ1,000Hzのサンプリングで取り込んだ。視標の移動開始に対する眼球運動の反応開始の典型例を図3に示す。眼球運動反応時間は、視標の移動開始に対する衝動性眼球運動の開始の潜時とした

3. 結果および考察

トレーニング前後の眼球運動反応時間の平均値と標準偏差を図4に示す。トレーニング前の安静頸部姿勢での反応時間は、 $192.9 \pm 11.4 \text{ ms}$ であり、振動刺激でのそれは $194.8 \pm 13.1 \text{ ms}$ であった。トレーニング後の安静頸部姿勢での反応時間は、 $186.8 \pm 10.5 \text{ ms}$ であり、振動刺激でのそれは $180.6 \pm 14.3 \text{ ms}$ であった。新たに開発した刺激器を用いた頸背部振動刺激による3週間の眼球運動反応トレーニングを通じて、脳賦活作用が生じることが示唆された。



図1 頸背部筋への振動刺激

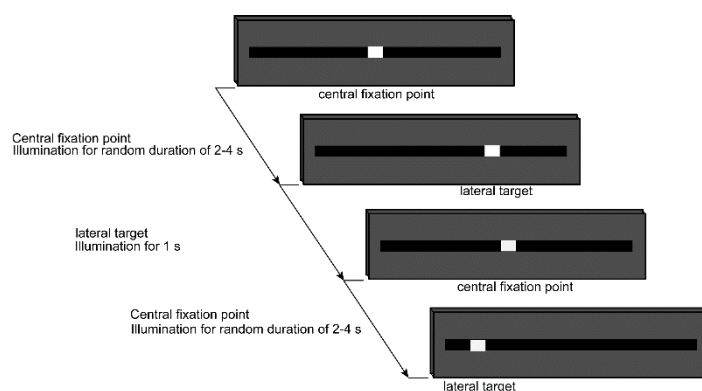


図2 視覚刺激

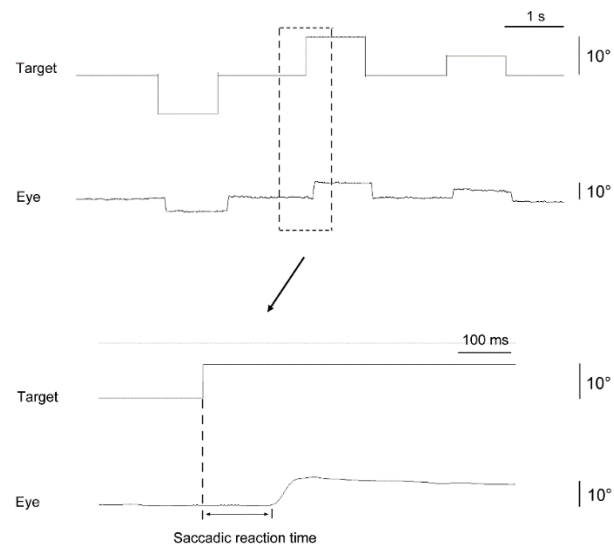


図 3 眼球運動反応時間の分析

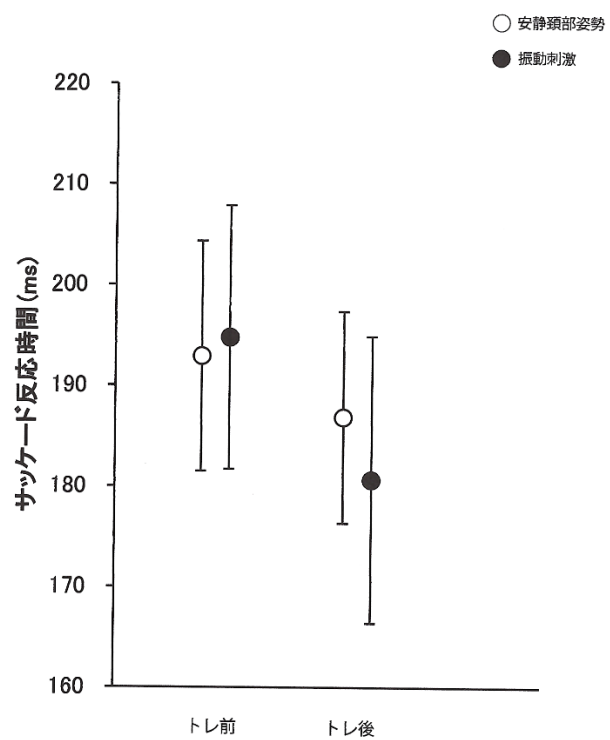


図 4 トレーニング前後の眼球運動反応時間の平均値と標準偏差

『札幌市の国際化推進等に関する連携協定』連携事業

―「多文化共生社会創成プロジェクト」報告書

1. 事業の背景

近年、「共生社会」をめぐる議論が一層活発になっている。その背景には、少子高齢化の進行による労働力不足や、外国人住民の増加といった社会的変化がある。現在、外国人の居住は都市部にとどまらず地方にも広がっており、日本のどこにいても、言語や文化の違いへの対応が必要となっている。また、人口減少が進行する中で、地域社会の維持・活性化を図るうえでも、外国人住民の存在はますます重要なものとなっている。そのため、国や自治体は、多様な人々が互いに理解し支え合いながら生活できる社会の実現を目指し、「共生社会」の推進に向けた様々な施策を展開している。

北海道においても外国人住民の増加傾向は顕著であり、北海道総合政策部の資料によると、2024 年度の外国人住民数は 67,484 人となっている。また、札幌市の住民基本台帳によれば、2025 年 7 月時点で約 22,048 人の外国人が在住している。こうした状況を踏まえ、札幌市は外国人住民と地域住民の双方が安心して暮らせる包摂的な社会の実現を目指し、2022 年 3 月に（公財）札幌国際プラザ、札幌国際大学および札幌国際大学短期大学部と連携し、「札幌市の国際化推進等に関する連携協定」を締結した。

この協定のもと実施している「多文化共生社会創成プロジェクト」では、札幌国際大学および札幌国際大学短期大学部の外国人留学生が札幌市内の小・中学校を訪問し、自国の文化や生活、言語などを紹介する異文化交流活動に積極的に取り組んでいる。これら取組みは、札幌市のグローバル化の推進や異文化に起因する社会的課題の予防に資するだけでなく、国際理解教育の充実という観点からも重要である。加えて、高等教育機関が有する人的資源を地域社会に還元するという社会貢献の側面も持ち合わせており、大学・地域・学校が連携する持続可能な教育モデルの一例である。以上のことから、本プロジェクトは三者にとって有益な Win-Win-Win の取り組みであるといえる。

2. 期待できる効果

○**小中学生への影響**：小・中学生にとって、本活動は日本の文化や生活習慣などを紹介しながら、異文化コミュニケーション能力を育む貴重な機会となる。活動に向けた事前準備や振り返りの過程を通じて、児童生徒の学習意欲の向上や主体的な学びの促進にも寄与している。また、留学生との交流の中で多様な価値観に触れることにより、視野を広げるとともに、他者を尊重する姿勢や国際的な感覚を養うことができる。

○**留学生への影響**：留学生にとって、自身のルーツやアイデンティティを再認識する契機となるとともに、日本語による発信力や表現力の向上にもつながる。さらに、限られた時間の中で分かりやすく伝える工夫を重ねることで、論理的思考力やコミュニケーション能力の育成にも寄与している。また、児童生徒からの質問や反応に触れることで、双方向的な学びが生まれ、異文化理解がより深まる点にも意義がある。

3. 事業の実施

実施校の募集については、札幌市教育委員会を通じて札幌市内の小中学校を対象に公募。提出された応募票や実施時期等をもとに総合的に検討した結果、以下 6 校に決定した。

日程	訪問先	対象	人数
2025/9/9	札幌市立百合が原小学校	6 年生	80 名
2025/9/18	札幌市立豊園小学校	6 年生	68 名
2026/2/6	札幌市立義務教育学校福移学園	8 年生	20 名
2026/2/10	札幌市立平岡南小学校	6 年生	88 名
2026/3/2	札幌市立上白石小学校	6 年生	32 名
2026/3/13	札幌市立二十四軒小学校	6 年生	63 名

参加者状況

【留学生】37 名【本学教職員】16 名 ※共に延べ人数

【小学生】331 名【中 学 生】20 名 ※共に実人数。実人数は在籍者をベースとしており、当日の欠席者数は把握していない。

札幌市立百合が原小学校

2025 年度の最初の取り組みとして、9 月 9 日（火）にマレーシア、ミャンマー、香港、台湾出身の

留学生 5 名が、札幌市立百合が原小学校 6 年生を訪問した。はじめに、陳先生によるアイスブレイクで場の緊張を和らげた後、留学生が母国の地理や食文化、日本で驚いたことなどについて紹介し、最後に母語での挨拶を教えた。児童は異なる文化や価値観に触れながら、興味深く耳を傾けていた。

続いて児童が「日本文化の紹介」をテーマに、温泉や着物、忍者、和菓子などについてグループごとに発表を行った。調べた内容をスライドにまとめ、クイズや質問を取り入れるなど、留学生に分かりやすく伝えようと工夫が見られた。留学生も関心を持って熱心に耳を傾け、メモを取りながら理解を深める様子が見られ、双方向の学びにつながる有意義な交流となった。



札幌市立豊園小学校

9 月 18 日（木）には、マレーシア、ベトナム、中国、香港、日本出身の学生 7 名が、札幌市立豊園小学校 6 年生を訪問した。はじめに、ニュージーランド出身のデントン先生による「日本食の英語表現」をテーマにしたクイズで場の緊張を和らげた後、児童と教員、大学生が 8 つのグループに分かれて交流活動を行った。各グループでは、大学生が用意したプレゼンテーションをもとに、自国の文化や生活について紹介。その後の質疑応答では、児童から「日本と留学生の母国との物価や治安の違い」や「友人関係を築く際に大切にしていること」など、多様で具体的な質問が寄せられ、活発なやり取りが見られた。また、マレーシアへの留学経験を持つ日本人学生からは、「海外に出て日本を外から見ることの大切さ」についてメッセージが伝えられ、児童にとって新たな視点を得る機会となった。

自由交流の時間では、ジェスチャーやお絵かき、連想ゲームなどを取り入れることで、言語の壁を越えた交流が生まれ、グループごとに工夫を凝らした活動が展開されていた。



札幌市立義務教育学校福移学園

2月6日（金）には、ミャンマー、香港、ポーランド出身の留学生6名が、札幌市立義務教育学校福移学園の8年生を訪問した。はじめに、陳先生によるクイズで場の緊張を和らげた後、8年生が、日本の「放課後の過ごし方」、「季節の行事」、「お菓子」、「食べ物」、「学校制度・教科」の5つのテーマについてグループごとに発表を行った。発表では、クラスメイトへのアンケート結果をグラフにまとめるなど、実態を分かりやすく伝える工夫が見られた。

続いて留学生が同じテーマについて自国の文化や生活を紹介し、生徒たちは熱心に耳を傾けていた。母国語のあいさつも学び、特にポーランド語の発音に苦戦しながらも、意欲的に取り組む姿が印象的であった。

フリートークでは、英語と日本語を交えながら、趣味や日本で驚いたことなどについて生徒が留学生に積極的に質問し、交流を深めていた。活動を通して、外国語でコミュニケーションする楽しさや難しさを実感する様子も見られた。



札幌市立平岡南小学校

2月10日（火）には、ミャンマー・香港・韓国出身の留学生6名が、札幌市立平岡南小学校の6年生を訪問した。はじめに、デントン講師による「この食べ物は英語で何と言う？」というクイズで場を和ませた後、留学生と台湾出身の陳先生が、それぞれの出身国について紹介を行った。発表では、地理や伝統的な祭り、代表的な食べ物に加え、日本に来て感じたカルチャーショックなどが取り上げられ、児童たちは興味深く耳を傾けていた。例えば、日本では叱られる際に「相手の目を見なさい」と指導されることが多い一方で、韓国では叱られているときに目を合わせることは失礼とされる場合があるとのこと。このように、私たちにとって当たり前だと思っている行動が、他の国では必ずしも同じではなく、場合によっては失礼にあたることもあるという、大切な気づきを得ることができた。最後には、

児童と一緒に各国の言語で挨拶を体験する場面もあり、異文化への理解を深める機会となった。



札幌市立上白石小学校

3月2日（月）にミャンマー・中国・台湾・ポーランド出身の留学生7名が札幌市立上白石小学校6年生を訪問した。はじめに、イギリス出身のコクスフォード講師による「この文化のルーツはどこ？」クイズで場を和ませた後、留学生が出身国の地理や食文化、日本との文化の違いなどを紹介した。各国の料理の写真が映し出されると、「お腹が空いてきた」「食べてみたい」といった声上がり、和やかな雰囲気の中で交流が進んだ。

その後は小グループに分かれ、児童が将来の夢や中学校で頑張りたいことを英語で発表した。科学者やピアニストなどの具体的な夢や目標をしっかりと伝える姿に、留学生も感心していた。

最後のお別れの会では、児童から「今日は交流できてよかった」という感想が聞かれ、留学生からも「英語力や話を聞く姿勢が素晴らしい」と励ましの言葉が送られた。



札幌市立二十四軒小学校

2025年度最後の活動として、3月13日（金）にミャンマー・中国・台湾・ポーランド出身の留学生6名が、札幌市立二十四軒小学校の6年生を訪問した。はじめに、池見先生によるインドネシアの伝統楽器を用いたTPR（Total Physical Response）のアイスブレイクで場を和ませた後、留学生が出身国の地理や宗教、おすすめの観光地、日本でのカルチャーショックについて紹介。さらに、台湾語で「私は日本人です」、ミャンマー語で「さようなら」といった挨拶を学び、児童は異文化への理解

を深めることができた。

その後は6つのグループに分かれ、より近い距離で交流を行った。児童は英語で「日本の大学生生活で大変なことは何ですか。」、「好きな動物は何ですか。」、「あなたの国で人気のスポーツは何ですか。」など積極的に質問し、留学生も丁寧に答える姿があった。

最後には、ミャンマー出身の留学生から「皆さんはとても元気で素晴らしい。興味を持って話を聞く姿勢を、中学校でも大切にして欲しい」と温かいエールが送られ、交流を締めくくった。



4. 今期活動において評価できる点

国際理解教育に積極的に取り組んでいる小学校が、本校との交流をこれまでの学習の集大成と位置づけ、意欲的に参加してくれた。事前学習で培った知識や関心を背景に、児童は高い意欲をもって交流に臨んでいた。留学生は各グループに分かれて少人数で発表を行い、児童一人ひとりが発言しやすい環境が整えられた。交流後には「自分のグループで聞いた留学生の話を他の人に伝える」という事後学習につなげることを意識し、児童は相手の話に真剣に耳を傾け、要点を理解しようとする姿や、積極的に質問する様子が見られた。

留学生にとっても、日本への理解を一層深めるとともに、地域の人々や児童との交流を通して実践的なコミュニケーション能力を高める貴重な機会となった。授業や日常生活では得られにくい、生きた日本語や文化に直接触れる中で、相手の立場や背景を意識しながら伝え合う力を養うことができた。さらに、異なる世代との交流を経験することで、自らの考えを分かりやすく表現する力や柔軟に対応する姿勢も育まれた。こうした経験は、今後の学業や日本社会の生活においても大いに活かされることが期待される。

5. 今後の課題

昨年度に引き続き、今年度の活動においても留学生ボランティアの確保に苦慮する状況が続いた。

今年度は初めて予算を活用し、参加する留学生に対して活動費の支給を行ったが、それでも余裕のない運営が求められた。特に、特定の留学生に負担が偏る場面も見られ、継続的な人材確保の重要性が改めて浮き彫りとなった。次年度に向けては、先輩留学生や教職員による周知・啓発活動を一層強化するとともに事前説明やフォロー体制の充実が求められる。

6. 2026 年度の展開

これまでの経験を踏まえ、次年度も引き続き訪問先を最大 6 校に絞った交流を計画している。また、訪問先や実施時期についても、札幌市教育委員会との連携をとり、調整の上進めていきたい。

総括：陳 堯柏（札幌国際大学観光学部観光ビジネス学科）

松村 知美（札幌国際大学国際課）

令和 7(2025)年度 地域・産学連携センター共同研究報告

2025 年度

沼田町とのスポーツ健康領域に関する連携事業に関する報告書

札幌国際大学スポーツ人間学部スポーツ指導学科

佐藤文亮、国田賢治

【はじめに】

沼田町に暮らす方々を対象に、沼田町と連携して、スポーツ健康連携事業を実施してきている。令和7年度は、沼田中学校の生徒を対象としたスポーツ教室（卓球）を複数回実施した。高齢者対象の健康づくり等の講話・教室の実施に関する打ち合わせや、中長期的な視点からの連携を模索するために、官学連携意見交換会を定期的に行った。また、沼田町が主催するマラソン大会（マラニック）に対し、協働型連携を行った。

【スポーツ教室に関する打ち合わせについて】

沼田町地域再興の観点をふまえて、令和7年度は、中学校における部活動活性化（卓球）に関する取り組みとして、児童や生徒対象のスポーツ教室を複数回実施した。沼田中学校卓球部に所属する部員6名（男性：3名、女性：3名）を対象として、4月30日、6月13日、9月12日、11月21日、2月27日の6日間実施した。この6日間は、教員と大学院生あわせて3名で対応した。国田教員、大学院生の大谷龍二さんが主な指導を担当し、佐藤は補助に回った。それ以外に、大谷龍二さんが単独で複数回指導に行ってくれた。

練習では、6名中5名は中学校から卓球を始めたこともあり、基本的な打ち方から指導した。フォアハンドの打ち方、カットサーブのレシーブ技術、スマッシュ技術、ドライブ技術などの技術練習など、生徒たちの要望に合わせて打技術の指導を行った。その他、多球練習やフットワーク練習など、実践を想定した応用技術の指導のほか、ゲーム経験を備えさせるための実践練習を行った。

沼田中学校の生徒、教員、沼田町職員の方からは、大変好評をいただいた。特に、

大学院生の指導がすばらしく、生徒からは「次回来ることがとても楽しみ」という評価をいただいている。次年度も継続して実施する予定である。

【マラニック 2025 の活動について】

2025 年 6 月 21 日（土）に開催された、ほたるの里 夏の SNOW（スノー）マラニック 2025 に、スポーツ健康指導研究科や観光学研究科の大学院生と、観光学部の大学生が、協働型連携の一環として、運営の補助に参加した。実施内容については、昨年度と同様であった。マラニックは、自分のペースで無理なくピクニック感覚でマラソンを楽しめるスポーツ事業であり、10 キロコース、30 キロコース、さらには 8 キロのファミリーコースのいずれかに、ランナーが参加する。事業に参加した大学生および大学院生は、ランナーの受付対応やクロック対応などの運営補助業務の他、ガイドランナーとして参加者と一緒にコースを回る業務を担当し、沼田町の特産品等が味わえる休息所などでランナーとスポーツ交流を行った。運営補助業務では、事業担当者の指示を受けながら、ランナーの受付対応やクロック対応がスムーズになるように学生間で役割分担を行って連携をはかり、効率的な運営がなされるように対応している様子が見られた。ガイドランナー業務では、ランナー集団の最後尾を走り、途中でコースがわからなくならないように補助する役割をこなした。2 年目ということもあり、業務内容については、学生に対して事前共有することができ、スムーズに導入することができた。ガイドに参加した学生 27 名がマラソンコースの中継地点で待機し、スタート時点からゴールまでたすきを繋ぐ形で連携して業務を遂行していた。大学生はスマートフォンなどを活用しながら、業務の進行状況をリアルタイムで共有し、スムーズな業務進行を行っており、大変頼もしかった。また、一般ランナーの方

と積極的にコミュニケーションを図り、スポーツイベントが地域活性に果たす役割を学習している様子だった。途中コースが分からなくなる参加者がいた場合にも、昨年度の経験を活かし、教員と学生のスムーズな連携を図ることができた。参加した学生からは、「比較的都心部から離れた地域でも、スポーツツーリズムの考え方をを用いた手法で、ヒトを呼ぶことができることを学んだ。その際に、緊急時における適切な対処や、運動実施前後や運動中における適切な運動強度の必要性をスタッフが理解しておくことが非常に重要であることを学んだ」などのフィードバックコメントがあり、大学生の実践型の学習機会として十分な役割を果たしていることが示唆された。沼田町マラニック実行委員会の担当者様からは、イベント終了後に、「昨年度も対応していることもあり、とても頼もしかった。イベント参加者の皆様の笑顔があふれる形で無事に成功することができたのは、大学生の協力によるところが大きかった」と感謝のお言葉をいただいた。

スポーツが地域社会にもたらす影響について、大学院生がさらに考究できるようにするために、マラニック終了後の7月17日（木）に、大学院生2名と、佐藤、本学非常勤講師の河田真清先生にて、沼田町役場に伺った。大学院生は、都心部から離れた地域の活性化におけるスポーツの可能性について、理解を深めたようだった。

【来年度の実施予定について】

令和 8 年度は、引き続き沼田中学校の生徒を対象としたスポーツ教室（卓球）を実施する予定である。さらに、高齢者対象の健康づくり等の講話・教室、および中長期的な視点からの連携を模索するために、官学連携意見交換会を定期的に行う予定である。また、沼田町が主催するマラソン大会（マラニック）に対し、協働型連携を行う予定である。

【沼田中学校の卓球指導の写真】



写真 1：沼田中学校卓球部への指導風景①



写真 2：沼田中学校卓球部への指導風景②



写真 3：沼田中学校卓球部への指導風景③



写真 4：沼田中学校卓球部への指導風景④



写真 5：沼田中学校卓球部への指導風景⑤



写真 6：沼田中学校卓球部への指導風景⑥

【マラニック 2025 の活動写真】



写真 1：学生の事業運営補助の風景①



写真 2：学生の事業運営補助の風景②



写真 3：学生の事業運営補助の風景③



写真 4：マラニックの様子①



写真 5 : マラニックの様子②

札幌国際大学地域・産学連携センター年報 第 10 号

2026(令和8年)年7月 発行

編集 札幌国際大学地域・産学連携センター
発行 札幌国際大学

〒004-8602 札幌市清田区清田4条1丁目4番1号

電話011-881-8844 FAX011-885-3370
